The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	体験的フィールドワーク論 : 民俗学者・宮本常一の足跡をたどることから［2017年度「日本学方法論の会」講演記録］
Author(s)	木村, 哲也
Citation	日本学報. 2018, 37, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71618
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

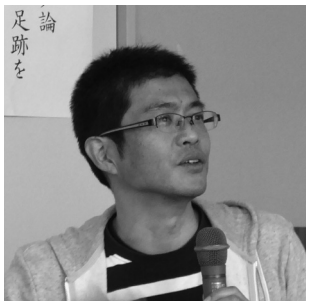
The University of Osaka

【特集】

体験的フィールドワーク論

～民俗学者・宮本常一の足跡をたどることから～

［2017年度「日本学方法論の会」講演記録］



木村哲也氏

講演：木村　哲也
司会・記録：北村　　毅

※2017年11月3日、大阪大学待兼山会館にて実施。

◆趣旨説明（北村毅）

時間になりましたので、2017年度の日本学方法論の会を始めたいと思います。日本学では、方法論の会と題して、日本学の学生の研鑽のために、毎年秋に学外から講師の方をお招きいたしまして、その年のテーマに即してお話しいただいています。今年は「聞き書きと民俗学」というテーマで、歴史学者・民俗学者の木村哲也さんをお呼びしました。今日は、ご自身のフィールドワーク体験や宮本常一をめぐってご講演いただきますが、最初に司会の方から簡単に趣旨説明をさせていただきます。毎年こういう形でこの会をやっておりますけれども、去年からの流れがありまして、実は去年も「聞き書き」をテーマに講師の方をお招きして、東北学院大学の黒坂愛衣さんにお話しいただきました。

黒坂さんは、2015年に『ハンセン病家族たちの物語』（世織書房）を刊行されていますが、実は本日講師としてお招きした木村さんも、ハンセン病を聞き書きのテーマにされてきた経緯があります。木村さんは、今年、『来者の群像：大江満雄とハンセン病療養所の詩人たち』（編集室水平線）という著書を刊行されたばかりです。黒坂さんは社会学的な方法でハンセン病の当事者を幅広く捉え直し、特にハンセン病の「家族」に聞き書きをされてきました。対して木村さんは、当事者への聞き書きが中心になるのではないかと思いますが、そのあたりのことは、後ほど木村さんの方からお聞きできるかと思います。

木村さんをお呼びしたのは、まさに今年の方法論の会のテーマにふさわしい方だと思ったからです。木村さんは、ご自身の聞き書きにもとづく著書を何冊か刊行されていますが、その内、『「忘れられた日本人」の舞台を旅する：宮本常一の軌跡』（河出書房新社、2006年）

と『駐在保健婦の時代 1942-1997』（医学書院、2012年）は、個人的にも多くを学ばせていただいたお仕事です。後者に関しましては、沖縄をめぐって私と少しフィールドもかぶっています。

ちょうど今、主に学部生を対象とした演習で『忘れられた日本人』を読んでいることも、木村さんをお呼びした理由の一つです。私から紹介するまでもないのですが、この本は、1960年に未来社から刊行されて、早くも80年代には古典入りして岩波文庫に入り、宮本常一の重要な仕事として広く知られています。その価値は重層的ですが、この本を若い人たちと読む意義の一つとして、私は、激動期の社会変化を生き抜いたかつての若者たちの日常生活の実践知を具体的に知ることができるということにあるのではないかと思っています。ここでいうところの激動期というのは、明治維新のことです。宮本は、この本のあとがきでこういうことを書いています。「今、老人になっている人々が、その若い時代にどのような環境の中をどのように生きて来たかを描いて見ようと思うようになった」。言うまでもないことですけれども、忘れてはいけないのは、宮本の話者となった老人たちも、かつてはここにいる学生たちと同じように若者であったということです。

一般的に、民俗学という学問は、失われつつある、あるいは失われた事象を対象とする懐古的なイメージを抱かれているのではないかと思います。民俗事象の真正性にこだわって、それを記述・保存することに存在意義を感じているいささか後ろ向きの学問というのが、民俗学に対する大方のイメージでしょう。必然、話者は高齢者ということになるわけですが、私が捉えている民俗学における聞き書きの意義はそういう側面だけではなくて、もっと前向きな「昔の話」との向き合い方にあります。今のお年寄りの話ではなく、かつて若者だった人たちの話と受け取ると、その語りにまた違った色彩が宿るのではないでしょうか。それは高齢者の話を聞くときに、いつの世でも有意義なスタンスではないかと思うわけです。

例えば、聞き書きのテーマとして戦争体験がありますが、言うまでもなくアジア太平洋戦争は明治維新に匹敵する時代の画期でした。戦争を挟んで社会がすっかり変わってしまったわけですけれども、その変わり様もまた、私たちがお年寄りにお話しを伺うときの重要なテーマになります。ちょうど『忘れられた日本人』に登場する話者と同じぐらいのタイムラグを挟んで、いま私たちは戦争体験者の若い頃の話をかろうじて聞くことができる最後の時期に入っています。

宮本常一の民俗学の可能性は、若者たちに常に何かが問いかけられているということにあるように思います。今を生きる若者たちは、その著作の一行一行から、時代時代を生き抜いてきた先達の知を読み取ることができるはずです。それを、生活の知、あるいは、生き方の知というように言ってもいいのではないでしょうか。

木村さんは、そういう宮本常一の仕事の一つひとつに正面から向き合ってこられた方です。今回あらためて、書かれてきたものをじっくり読ませていただいて、木村さんの問題関心というのは、宮本常一が「何を」聞いたかということだけではなくて、「どのように」聞いたかという部分にあるのではないかという感じがしました。木村さんのお仕事の面白いところは、ご自身が話者にアプローチしていった過程を丁寧に記録してくださっているところにあります。そこに、これから聞き書きをしていく、あるいは今している学生にとってヒントがいっぱい詰まっていますが、そのあたりの詳細をすっ飛ばして書く研究者が多い中で貴重な情報となります。

そういう木村さんのスタンスについて、私は、非常に実践的なリーディングだなという感じがしています。少し説明が必要かと思いますが、宮本常一のテクストを読むというだけではなくて、さらにそこから歩いたり聞いたり、体を動かして何かをされているわけですよね。そういう意味で実践的なリーディングと呼びたいのですが、平たくいうと、おかしな表現になりますが、テクストを足で読んでいるというように思ったわけです。テクストというのは目で見たり、心で感じたりということは何となくわかると思うのですけれども、足で読むということは一体どういうことなのか、そのあたりのことも、今日それぞれが木村さんからヒントをいただいて持ち帰っていただけたらなと思っています。

趣旨説明が少し長くなりましたが、それでは、木村さん、よろしくお願いいたします。

◆講演（木村哲也）

○学問的なバックグラウンド

どうも、はじめまして。木村哲也と申します。丁寧なご紹介をいただきまして、ほんとうにありがとうございます。今のお話しから、前回も、研究の志や方向性を共有できるような方を招かれていることを知りました。限られた時間ですけれども、みなさんにとっても、僕にとっても何か新しいことを発見できる場になるといいなと思っています。

まずは自己紹介ということで、レジュメに書いておきましたけれども、自分の学問的なバックグラウンドからお話ししますね。私は、東京都立大学の史学科を卒業して、いわゆるプロパーのヒストリアンとして研究者の一歩を踏み出しました。文献史学から始めたわけです。指導教員は、佐々木隆爾先生。2001年に退官されましたが、非常にきちっとされた日本近現代史の大家のもとで勉強しました。ただ、佐々木先生のもとでは、フィールド調査はまったくできませんでした。

フィールドワークができない環境でしたので、大学院では、神奈川大学の歴史民俗資料学研究科に進学しました。ここは、宮本さんとも所縁があった渋沢敬三が開設した日本常

民文化研究所――当時ほとんど開店休業状態だったのですが、それを神奈川大学に1982年に移して、その研究所との連繋のもとで設置されました。大学院大学というか、特定の学部に基礎を置かない研究所が大学院をつくった、そういう性格の研究科です。いわゆる資料学というか、歴史学と民俗学を一緒に研究しようという大学院でした。ここでも、一応自分の学問的なバックグラウンドは歴史学でしたから、歴史学の先生につきまして、修士の頃は中島三千男先生の指導を受けました。この方は、神奈川大学の学長もされた方で、天皇制や国家神道を中心に近代思想史を研究テーマにされていました。博士課程では、中村政則先生のもとで勉強しました。長いこと一橋大学にいた日本経済史の先生です。一橋を経て神奈川大に移られて、当時特任教授でおられました。

歴史民俗資料学研究科は、民俗学も同時に勉強できる環境にありましたので、宮田登先生や福田アジオ先生の指導を受けました。民俗学の先生と一緒に民俗の調査に出たり、あるいは網野善彦さんという日本中世史の先生が文書調査に連れて行ったりしてくれました。愛媛県の瀬戸内海の離島、二神島・由利島なんていうところへ連れてってくれて、そこでの文書調査にも参加させていただき、そういうことがすごく糧になりました。一つの学問的な方法をマスターするというのが大学院に入ってからのトレーニングということになるかと思いますが、私の場合、自然と歴史学と民俗学の両方の方法で考えるようになっていきました。それが自分のバックグラウンド、学問的な背景になったということは、最初に自己紹介としてお伝えしておきたいと思います。

○大学の制度の外で影響を受けた人たち

それから、もう一つは大学の制度の外でどれだけ自分の思考の場をつくったかということが、たぶん大事になってくるのだろうと思います。そこで、自分の学部以後を振り返って、大学の制度の外で影響を受けた人たちのお名前を挙げておきました。一人は鶴見俊輔さん。この方も、2年程前に亡くなられました。元々は哲学、アメリカのプラグマティズムをやっていた哲学者ですけれども、晩年は大学を離れて、ずっと在野の研究者でした。『思想の科学』という雑誌をつくりつづけた方でもありますが、この雑誌は、言ってみればいろんな分野の学問をやる人たちが共同研究をするような場所でした。鶴見さんと知り合ったことで、『思想の科学』に書かせてもらったのが、僕が最初に初めて原稿料をもらって書いた原稿なんじゃないかなと思います。鶴見さんと一緒に本を作ったりもしました。非常に影響を受けた方です。

もうお一方は、鹿野政直先生。当時早稲田大学で、日本近現代史を教えられている方は鹿野先生だけでした。鹿野先生は、いわゆる民俗学ではありませんが、民間学という学問を提唱されて、大学の制度の外にある研究者、在野の研究者なんかを発掘して、歴史の光

をあてるというようなことをされていました。学部の頃、鹿野先生公認で授業にもぐりに行きました。鹿野さんも当時、北村さんと同じように、学部で宮本常一の著作を自分の学生たちと読むということをされていました。その実践はあまり表になっていないのではないかと思います。鹿野さんの著作集が岩波書店から出ていますけれども、宮本常一についてはほとんど書かれていません。あれは大学の授業で1回やったきりなのではないかと思います。貴重なそういう場に居合わせることができたと思っています。鹿野さんは、民間学だけではなく、沖縄に関しても非常に優れた研究されてこられた方ですが、まだこういう方々が大学にいた頃なんですね。

先ほどお話ししました網野善彦さんもそうです。この方とも、大学の制度の中というよりは、僕の場合、制度的な師弟関係はなかったので、廊下の立ち話とかゼミでの飲み会などでいろんなかたちで議論させてもらって、それが肥やしになったという感じがします。

最後に、田村善次郎先生。宮本常一の教え子の一人で、武蔵野美術大学で民俗学を教えられていた方です。宮本さん自身が、ほとんど定職をもたずにずっと在野で研究されていた方ですけれども、ようやく58歳のときに、初めて定職に就いたのが武蔵美でした。ということで、武蔵美にはわりと宮本さんの足跡が残っているんですね。田村さんは、その教え子の一人で民俗学を教え、民具を民俗資料室というところに集められました。当時まだ、宮本さんの著作集が定期的に未来社から刊行されていた頃で――今は51冊を出してほぼ完結したような状態になっていると思いますが――、田村さんに宮本さんについて興味があると言ったら、「著作集の編集を手伝ってくれよ」ということになりました。僕の東京の自宅と武蔵美は自転車で通える距離でしたから、学生の頃は毎週木曜日に田村さんのところに行って、まだ著作集に入っていない宮本常一が書いた文章をコピーして、テーマごとに整理する作業を手伝っていたんですね。そこで、まだ表になっていなかったものも含めて、宮本さんの仕事の全貌を知る機会となりました。大学の制度の外で、わりと自分の生きた学問につながるような出会いがたくさんあったなと、今にして思うんですね。

ですから、みなさん、こういう先生方も、みなさんみたいな学生さんが門を叩けば、「帰れ」という人はほとんどいないわけで、まずは「よく来たな」って話を聞いてくれます。そして、相談に乗ってくれたり、あるいは「毎週こういう集まりがあるから来てみないか」とか「今度こういう調査があるからそこへちょっと手伝いに来ないか」とか声をかけてくれるものなんですね。そういうことを、学生のみなさんが積極的にどれだけできるかということが自分のプラスになるように思います。こういうことはなかなか教えてくれる人がいませんが、好奇心のアンテナを広げておいて、「この人は」という人に会いに行くことが大事なんじゃないでしょうかね。今言ったようにそれを拒む人はほとんどいないはずですから、ぜひ自分で門を開いていってください。

○これまでに取り組んできた研究

次に、これまで私が取り組んできた研究テーマについてお話しします。大きく3つくらいのテーマに分けられるのではないかと思います。一つは博士学位論文にもなった駐在保健婦に関する研究です。先ほどご紹介いただきましたように、その研究は『駐在保健婦の時代』という本としてまとまりました。

もう一つは、大江満雄さんとハンセン病療養所の詩人たちに関する研究です。これも今日は時間があまりありませんので、ちょっと端折りますけれども、僕は出身が高知県なんですが、大江さんも同郷の方で、1991年に85歳で亡くなられた詩人です。僕が学生の頃に亡くなられたんですが、忘れられた詩人といった感じでした。この人が、若い頃に全国のハンセン病療養所の人たちと共に詩を作るということをつづけてこられて、今も全国に13箇所あるハンセン病の国立療養所を回られたわけです。大江さんは、ハンセン病の人たちの書く詩に感動して、誰からも頼まれもしないのに療養者と詩を介した交流をつづけられたのですが、その足跡をたどって、『来者の群像』という本にまとめました。

最後に、宮本常一の研究です。宮本さん自身も、ほとんど忘れられた民俗学者でありました。僕が知った頃というのは、まだ評伝も出ていなくて、高校卒業の頃に『忘れられた日本人』を読んで、こんな本があるのかとびっくりした記憶があります。もっと知りたいと思っても、当時まだ宮本さんについての評伝が書かれていませんでしたから、その時自分が書いてやろうと思ったんですね。宮本さんがどういう人か知りたくて、とりあえずその人が書いたものを読む作業を始めたわけです。それと並行して、まだ当時は宮本さんが旅をして出会った人たちの子孫が生き残っていたので、それらの人々に会いに行きました。あるいは、宮本さんが話を聞いた世代のお孫さんにあたる世代の人たちがもうお年寄りになっていて、当時まだ日本各地にいらしたわけです。宮本さんの本を読んで来ましたと言うと、「ああ、それは宮本さんがうちのじいさんに聞いて書いた本だ」とか「孫の自分がまだ子どものころ、宮本さんが来たのを覚えている」とか、そういう話を聞けました。ちょうどみなさんと同じくらいの学生時代に全国を訪ね歩いて、宮本さんの本を読んではその土地に行って、関係者を探し当てて、その人に話を聞くということをつづけてきたわけです。それを一冊にまとめたのが『「忘れられた日本人」の舞台を旅する』という本ですが、そういう旅を僕がしていた頃からもう20年が経っていますから、現在、宮本さんのことを覚えている人を探すのはほとんど不可能なんですね。ですから、今はちょっと同じような方法は望めないかなと思います。

○宮本常一への新しいアプローチ

宮本さんは1907年生まれですので、ちょうど今年は生誕110周年なんですね。その節目を記念して、「人間学工房」（https://www.ningengakukobo.com/dennote）というホームページで、今年4月から「宮本常一伝ノート」という連載をしています（2017年12月、完結）。これは、多摩美術大学の中村寛さんという文化人類学を研究されている研究仲間が主催しているホームページです。今日の講演の話をいただいたときに、もうすでに本になって書き終えていることを喋ってもあんまり面白くないかなと思いましたし、学生さんに自分の本を買わせるというというのを躊躇したので、だったらタダで読めるものがいいだろうと思って、「人間学工房」の「宮本常一伝ノート」をご紹介させていただきました。

ここでは、私は、直接関係者に会って話を聞くという手法をとっていません。あれやこれやで、いろんな新しい方法にトライしてみようということです。方法というとかっちりしたメソッドをイメージされるかと思いますが、それ以前にいろんなかたちで、これまで宮本常一に対してアプローチしてきた人が取らなかった方法を取ってみたらどうだろう、どうなるだろうということを連載で試みています。

Ⅰ、空襲で焼失した戦前の調査ノートの空白を埋める

宮本さんの履歴は、敗戦を挟んで非常に大きな断絶があります。宮本さんは、戦前一年間に200日を越える旅をつづけていたような人で、膨大な調査ノートが残っていたわけですけれども、そこで空襲に遭うんですね。戦前は大阪府堺市鳳に住んでいたのですが、空襲で一切合切の蔵書、写真、調査ノートの類を焼失します。戦後またあの人は旅を始めたわけですけれども、書き残したもの、作品になったものは空襲を免れた時点までのものか、戦後新たに旅をしたもののどちらかなんですね。空襲で失われたものは、結局作品化されていませんから、各地で一体どんな調査が行われて、もし作品になったとしたらどういうものが残されただろうかということで、無い部分から有った可能性を探ってみるという方法をとってみました。

最初に取り上げたのは、宮本常一が旅をした高知県四万十川の鵜飼いです。今の長良川のいわゆる観光鵜飼いとは違って、本当の鵜飼いです。こうした生活のために鵜飼いをしていた人がいて、そういう人に宮本さんは話を聞いていたのですが、その鵜飼いの最後の生き残りの方に話を聞いたりしました。あるいは、宮本常一は、四万十川流域を旅した1941年に、太平洋沿岸の高知県幡多郡月灘村の西泊（現・大月町）でサンゴ漁の調査をしているのですが、そこで話を聞いたりもしました。

Ⅱ、調査ノートと作品を比較する

それからもう一つ連載でやってみたことは、調査ノートと実際に宮本さんが書いた作品との間の比較です。宮本さんの調査ノートは今復刻されています。宮本さんの遺品は、生まれ故郷の周防大島にできた宮本常一記念館に遺族がすべて寄贈しましたから、そこには、調査ノート200冊、蔵書が二万冊、それから戦後のものですけれども撮った写真が十万枚、それらが全部保管されています。その記念館が調査ノートを活字にして刊行して、一冊千円くらいで売られています。だから、宮本さんが残したノートを今知ろうと思えばいくらでも可能なわけなんですね。しかし、まだ誰もやっていなかったので、やってみました。

Ⅲ、宮本が歩かなかった土地から考える

それから、もう一つは宮本さんの歩かなかった土地から考えるという試みです。宮本さんは、特に離島振興なんかに関わられて、全国の島という島を歩いたと言われているのですけれども、もちろん宮本さんが訪ねられなかった島もあるんですね。宮本さんは、東京に離島の若者たちを呼び寄せて、年に一回「離島青年会議」というのを開催して、島の未来をどうするかということを徹底的に討論させることを毎年やっていました。その会議に島民が参加したけれども、宮本さんはその島に実際来ていないという島がありました。それは高知県の沖の島なんです。そこで、宮本さんの歩かなかった土地から考えるということをやってみました。

その沖の島の人は、離島青年会議で宮本さんに心酔して、その言葉に影響を受けて、一生その島で暮らし離島振興に一生を捧げた人なのですが、宮本さん自身が来ることはなかった。そういう場所というのは、宮本さんを論じる際に、絶対に誰にも見向きもされませんからね。宮本さん書いていない以上当然といえば当然ですが、ただし、島民と宮本さんとの間に密な交流があったということも、今回の連載で明らかにすることができました。

Ⅳ、写真を模写する

模写というのは美術における重要な手段の一つで、その作家の技法に近づくために、その人と同じように描いてみるということです。夏目房之介という漫画評論家は、ご自身が漫画を描く人ですが、この人は作家の模写から革新的な漫画論を切り開きました。つまり、白土三平でも藤子不二雄でも手塚治虫でも、結局描線に思想が表れるというんですね。それまでの漫画論というのは、テーマを論ずるとかセリフを論じるとかいうことはあっても、

描線そのものを論じるとかコマの割り方を論じるとか、そういうアプローチする人っていうのはほとんどいなかったわけです。

それを、夏目房之介さんっていう方は自身がペンを持って、その人と同じ描線を書くことで、漫画家が線に込めた思想を知ろうとしたわけです。つまり、なぜその線を選ばなければならなかったのかとか、この人が書く目というのはどうしていつもこうなのかっていうことです。その結果、鉄腕アトムにしても、初期のアトムと後期のアトムで描き方が変わるわけですが、その変化を読み解くことが可能になりました。

そういうことにヒントを得て、宮本さん自身が撮った写真の撮り方に注目しました。さしあたって、3つ挙げておきましたけれども、第1に俯瞰です。つまり、高いところから景観を見下ろして、畑のかたちや建物の建ち方が全部分かるような写真を撮ることを宮本さんはしょっちゅう旅先でやっていました。第2に、移動撮影です。これも特徴的な宮本さんの写真の撮り方で、旅を始める駅から始まって、移動中の電車の窓に張り付いて写真を撮っているんです。あるいは、港で船に乗ってから、船からの風景を目的地に着くまでずっと撮っているんですね。あるいは飛行機に乗れば、上空からずっと写真を撮っているんです。そうすると、そのフィルムを横に並べていくと、宮本さんがどこをどう移動したのか、絵巻物のように辿ることができるんですね。それは、相当方法を意識して撮られた写真であるということがわかります。第3に、定点観測です。同じ場所に何度も行って、同じ場所から写真を撮るんですね。何年にもわたってそうやって同じ場所から写真を撮っていくと、道が広がったり、あるいは埋め立てが進んで埋め立てられたところに道ができたり、埋め立てられたところに町ができたりっていうことが分かってくるんですよね。そういうことを宮本さんは写真を通じてやっているんです。同じようなことを自分で直にやって見るとどういうことがわかるだろうかということですね。

先ほど北村さんが話されていたような民俗学者に対する一般的なイメージ、民俗社会の昔話だけを聞くものだというようなイメージは、こと宮本さんに関して言えば、こういった写真の撮り方一つとっても覆されるということですね。とにかく、目の前で起こっていることに対する異常な関心といってもいいかと思いますが、鋭敏な感覚でアンテナを張って、目の前で起こっていること、いま現在のことをしっかり記録するということが宮本さんの方法なのだということがよくわかってくるかと思います。

Ⅴ、若い仲間たちとの「相互影響」に焦点を当てる

宮本さんは、若い学生とともに旅をすることが好きで、一緒の旅を通してユニークなお弟子さんをたくさん育てられました。さらに、弟子筋にあたる人たちが新たなフィールド

を開拓して、そこで村おこしに関わったり、景観保全に関わったり、民俗調査をしたりっていうことをされたわけです。宮本さんを論じる際に、何でもかんでも「宮本常一」を主語にして語るということが、わりとこの10年20年横行していていますが、実はそういう宮本さんのお弟子さんたちこそが主役だったりするんですね。宮本さんが2回くらい行っただけに過ぎない場所についても、彼が村おこしをした場所として論じられる場所があるので、それは今一度問い直してみる必要があると思っています。宮本さんも確かにその場に行って村人と交流したかもしれないけれども、宮本さん自身が若い仲間たちから何かを教わって、宮本さん自身が変化するようなこともあったんじゃないだろうかという視点から、その相互影響をみてみたいということで、そういう場所をめぐり、お弟子さんたちに話を聞いたりといったことをやってきました。

○「景観が語る」ということ

やっと本題に入ります。今日は、宮本常一を手掛かりに、フィールドワークの魅力や可能性についてお話しします。宮本常一の歩いた場所をいろいろ歩いて、僕があっと思ったのは、「景観が語る」ということですね。宮本さんが生まれた周防大島は瀬戸内海の島なんですけれども、ここに白木山という山があります。標高374メートルですから、たいして高い山じゃないんですけれども、これが白木山です（**写真１**）。

写真１

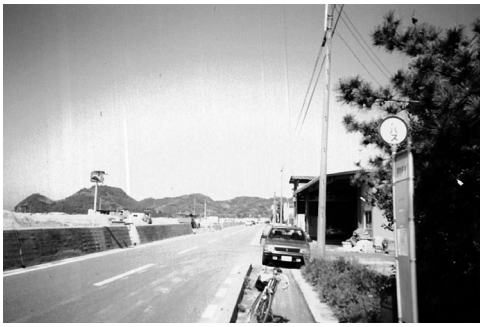


写真２

宮本さんの生家は、**写真１**の左の方にあります。ちょうど宮本さんが住んでいた頃は、ここに写っている手前の道路の真下が海だったんです。ずっと埋め立てられて、**写真２**がちょうど僕が初めて行った頃。道路のさらに海側を埋め立てるためにブルドーザーが入っているのが分かりますよね。宮本さんの生家が**写真２**の右側にあるとしたら、もうここまで埋め立てが進んでいます。**写真３**が、今年の春の様子。いまこんな感じですね。先ほどブルドーザーが入っていた場所に運動場ができて、道の駅ができています。僕が初めて行

ったときは、ここは海だったんですけどね。この20年間でも、定点で見るとそれぐらい変わっているんです。

写真４は、いまお話しした白木山の上へ登って、その中腹から見た風景です。これが宮本さんの生家がある集落なんですけれども、ずっと海が見えますね。これは本州に向けて見ているのですが、何が言いたいかというと、この白木山に登ると、本州と四国と九州が同時に見えるんです。そういう場所があるだろうなっていうことぐらいは想像が付きますが、実際この頂上へ行って見てみると、やっぱりある種の感慨が湧きます。

写真３

写真４

宮本さん自身が、この白木山からの景色について書いています。この山は、この土地の、宮本さんが生まれた生家のあるこの場所の子どもたちの心の原風景っていうか、必ずこの山へ登ったことがあるという山なわけです。ここから、九州が見え、四国が見え、本州が見えれば、子ども心にも、あそこにどういう人が住んでいるのだろうかとか、そこにはどんな街があるのだろうかとか、どういう魚が獲れるのだろうかと思いをめぐらせるわけです。宮本さんは、「この山から見える風景が私を旅人にした」っていう印象的な言い方をしていますけれども、そういう場所なんですよ。行ってみるとそういうことが非常によくわかるんです。

島も、孤立した島としてあるわけじゃなくて、ここは、人の移動の大動脈だったんですよ。島というと離れ小島とか絶海の孤島とか呼ばれて、人との交流のない場所みたいに思うかもしれませんが、瀬戸内海は陸上交通に取って代わられるまでは船が主体ですから。今はもうこの島は1976年に橋が架かって半島化しましたが、当然宮本さんの頃はまだそういう島だったわけです。人との移動が非常に激しかったところで、そういう意味では、一番人通りの激しい交差点にあるような島だったわけです。四国と本州と九州の三叉路のど真ん中にこの島があるわけですからね。だから、そういったところからも宮本さんの原点がよくわかるような感じがしました。

宮本さんとの縁でいろんなところ行ったんですけど、対馬なんかは、一番北の端から韓国まで50㎞しかないので、夜になると韓国の街の明かりが全部見えますしね。この間、僕は初めて稚内の宗谷岬っていうところに行ったんですけど、そこは対馬と韓国よりももっと近くに樺太（サハリン）が見えました。ここは一番短いところで43㎞しかないんですよね。もうすぐそこなんですよ。もっと近いのが、竜飛岬と北海道の間で、20㎞しか離れていません。津軽海峡は、アイヌ語で「塩っぱい川」って呼ばれていたようで、そこは海じゃなくてひとまたぎできる川だという認識でした。当然行き来ができたわけですよね。もう一つ例に挙げると、与那国島が日本の最西端ですが、台湾まで110㎞ぐらいです。僕が与那国に行った時には台湾は見えませんでしたけれども、年に1回か2回は台湾が見える日があるんです。与那国はいま国境地帯ですけれども、行ってみると、すぐそこに陸地が見えて、これだけしか離れていないっていうことがよくわかる。そうすると、当然人の行き来がありますから、日本が孤立した島国というような考え方はすっかり改めないといけないっていうことが非常によくわかる。

これは宮本さんが書いていることなんですが、宮本さんが高知に行った時に、飛行機の中から土佐山中を眺めていたら、海岸から川がずっと山の方へ向かって延びていて、そこに水田が開けている様子が見えたというんですね。そうやって弥生時代の水田が開拓されていって、川を遡るかたちで人が住み着いていったのだろうということがわかる。それがあるところまで行くといったん途切れる。それで、途切れた後に何が起こるかというと、さらに山の奥の方に行くと、ぽつんぽつんと畑作で生活しているような水田を作っていない集落が現れるっていうんですね。これはいったいなぜかということなんですよ。こういうところに宮本さんの真骨頂があって、宮本さん自身結論は出していないのですけれども、景観からそういう問いを抱えておくことの重要性を投げかけてくれているわけです。宮本さんは、この山奥に住んでいる人たちというのは、日本の先住民なんじゃないかという一つの仮説を立てるわけです。後から稲作が入ってきたときに、別のルートから別系統の人たちがそうやって水田を切り開いていったんだけれども、あるところでプツンと切れて断絶がある。景観の中で、つながっていないわけなんですよ。日本には、そういう不思議な景観っていうか、ヒントになるような景観がたくさんあって、山林の利用にしても海岸の利用にしても景観を見ることからいろんなことが見えてくると思います。

大阪ですから大阪の話もちょっとしたいのですが、『忘れられた日本人』に左近熊太さんという世間師として紹介されている方が出てきます。滝畑というのは、今はもう滝畑ダムができて、水底に沈んでしまった場所なんですけれども、ここは両墓制という風習があった場所でした。埋め墓と拝み墓というのが別々にあるんです。当時はまだ火葬しませんから、そのままご遺体を集落の外れのできるだけ遠くに埋めるわけです。でも、そこまで

拝みに行くのは大変だから拝む墓は家の近くに建てるということです。ですから、同じ人の墓が二つあるんですね。

写真５

写真６

写真７

これは、左近熊太さんの墓ですが、**写真５**が拝み墓で、**写真６**が埋め墓です。ですが、当時の墓は全部ダムの底に水没しちゃっているわけなんですよね。その後、滝畑霊園という大きな霊園を水没しなかったダムの脇の高いところに新しく建てて、そこに、埋め墓の墓石と拝み墓の墓石を全部一緒くたにして集めてしまったんです。両墓制というのは、その土地の不浄観とか、他界観とか、霊魂観とか、その土地に生きる人びとのコスモロジーを知るうえで大変重要なものですが、こうなってしまうと、もはや両墓制の意味もなにもないわけで、ダムの建設がそういうものを破壊したということをあんなふうに思い知った景観っていうのはなかったですね。ですから、今は、**写真７**のように、「左近家の墓」とし

て代々墓を建てているんですが、拝む方の墓には今も花が絶えないのです。埋め墓が今あるこの場所はご遺体を埋めてある場所じゃないですよ。霊園の中に作られた一緒になってしまった墓ですからね。墓石だけは同じ場所に持ってきて並んで建っているわけです。いまのところ意味のないことをやっているわけです。埋め墓には、当時からの風習で花は活けません。花を供えてある方が拝み墓ということになります。こういったことも今ある景観から解いていくと、「昔は拝み墓と埋め墓というお墓があってね」って話になるわけですよ。そうすると、ああ、ここは両墓制を取っていた場所なんだなということがわかったりするんですね。

もう一つだけちょっとお見せしたい写真があるんですね。『忘れられた日本人』に出てくる島根県の邑智郡の出羽は、戦後間もない頃まで牛市が立つ村だったところです。中国山地中から牛が集められて、牛小屋につながれていました。その牛小屋が残っていて、いつ壊されてしまうか分からないというので、**写真８**は、20年以上前に見に行った時の写真です。相当年季の入った牛小屋なんですが、近隣の方が車を停めたり、トラクターを停めたりしているんですね。元々は牛小屋ですから、牛だって当時はトラクターのように物の運搬や耕作に使うものだったわけで、この場所の流用のされ方としては非常に面白いなと思って撮った写真です。これ去年行ったら、まだ残っていたんですね。**写真９**のように、今はもう倒壊寸前で、ここで車を停めている人は一人もいませんでした。1994年に最初に行ったときは車庫として利用されていましたが、今では牛市が開かれていたという碑が建てられていて、もう生きたものではなくなってしまっています。実際にその場に立ってこういった景観の変化を見るということは、かなり面白いことです。そういった「景観が語る」ことに敏感になってください。それが、フィールドワークすることの意味の一つだと思います。

写真８

写真９

○“音”の記録は残りにくい

『忘れられた日本人』の冒頭に、宮本さんが法螺貝の音で目が覚めたっていう記述があります。この本は、宮本さんが長崎県対馬のある集落で古文書を借りたいと言った時に、古文書を貸すか貸さないかを巡って何日にもわたって、結論が出るまで寄合が開かれたというエピソードから始まりますが、その寄合をする合図が法螺貝だったということなんですね。何日も決断が出るまで寄合を開くなんてことあるんだろうかと思って、実際にそこに行って、当時の人に話を聞くと、本当にそういう寄合をしていたそうです。ですが、こういった音の記録というのは残らないんです。よくぞこうやって音のことを記録してくれたと思います。実際に法螺貝を吹いて、半日で終わる寄合なのか一日がかりなのか、神社の総代の寄合なのか村全体にかかわる寄合なのかということを音で吹き分けたということを聞きました。宮本さんは書いていませんが、僕が聞いて知ったことなんです。そういうふうに法螺貝を吹き分ける世界がついこの間まで残っていたということなんですね。

そのことを知ってから、行く先々で、寄り合いの際に何か合図がありましたかと質問すると、いろんなことを聞けるんですよ。自分の実家がある高知県の太平洋に面した村なんかでは、やっぱり神社で寄合を開いて、恵比須さんの神社で太鼓を叩いて寄合の合図にしていたよっていうことを、宮本さんの経験を経て、自分の村で教えられるみたいなことがあるわけなんです。村の寄合なのか神社の寄合なのか漁師の組合の寄合なのかといったことを太鼓を叩き分けて知らせたって言っていましたね。

他にも僕が旅したところで、長崎県の五島列島の有川というところは、捕鯨が盛んだったところなんですけれども、イルカが湾の中に入ってきたことを告げるのに笛を吹いて村中に知らせたっていうんですね。小笠原に行ったとき印象深かったのは、捕鯨が終わってクジラを獲って帰ってきて二見湾という湾の中に入ってきた船が、マッコウクジラが獲れたのかミンククジラが撮れたのか、汽笛を鳴らし分けたという話で、島で船を迎える人たちにクジラの種類を知らせたっていうことです。こういうことってなかなか記録に残らないのですが、湾を横切って船が入ってくる絵とセットになって、いわゆる庶民の人たちの記憶に残っている。クジラを積んだ船が帰ってきて、お父さんが帰ってくるっていう、子どもの頃のある種の高揚感を伴って残っている。そういう音のことは、文字の記録に残りませんから、現地に行って聞くしかないんですね。そういう楽しさがあります。

○フィールドワークと文字資料

フィールドワークというと聞き書きだけすればいいのかというと、そうではなくて、文字資料も大きな一つのヒントになってきます。宮本さんはそのことをよく分かっていて、『忘れられた日本人』の中には「文字を持つ伝承者」っていう章がありますよね。そこで

紹介されている島根県の田中梅治さんのお孫さんの勘助さんにお会いしたときの話ですけれども、公民館に梅治さんが残した資料があるというので見せてもらったらすごいんですよ。とにかく書いているんですよ。**写真10**ですが、これはほんの一部ですけど、段ボール何箱にもわたって、本当に小さな字でびっしり書いてあるんですね。文字を知ることができて、とにかく何でもかんでも書き留めておかなければならないっていうような感じでしたね。

写真 10

この時、これだけものを書いている人なので、宮本さんがここに訪ねてきたときのことを梅治さんが書いてないだろうかと思ったんです。そうしたら、出てきたんです。そのことは、『「忘れられた日本人」の舞台を旅する』に梅治さんが書いたものを抜き出していますけれども、「宮本常一という人が来て」って書かれていました。今だったら、「宮本常一先生が来て」とか書かれるかもしれないけれど、宮本さんのことが誰だか分からないわけだから、有名かどうかも分からない人だから、「という人」と書かれているわけです。

僕がこの資料を読むときに、非常に難儀したことがありました。コピーさせてもらって読み下したんですけれども、「岡野」という言葉が出てきたんです。岡野まで人をやって、人を呼んできてって書いてあったんです。それで、宮本さんに田植え歌を聞かせたって書いてあったんですね。岡野って地名かなと思ってずっと調べたんだけど、どうも近くにはないようなんですよね。それで、人名なんだろうかと思ったんですが、どっちでもなかったんですよ。現地で聞いたら、屋号だということがすぐに分かった。「伊藤さんの家の屋号ですよ」って言うんですね。伊藤さんという人が田植え歌の名人で、その家は目と鼻の先にありました。いくら岡野って読めても、岡野が地名なのか人名なのか分からないことがあります。でも、一生懸命調べても分かんなかったことが現地で聞いたら一発で分かることがあるわけです。

それと、「人間学工房」の連載の中で紹介したエピソードについてお話ししたいと思います。愛媛県に二神島という島がありますが、ほとんどが漁師ばかりの漁業の島です。明治5年に明治政府が壬申戸籍という新しい戸籍を作りますが、これは非常にデリケートな身分差別のことを明記してあるというので、現在では法務省が封印して、研究者であってももう閲覧ができなくなっています。ただ、フィールド調査をして、村の庄屋さんクラスのところへ行くと、壬申戸籍を提出した控えっていうのが残っているんですね。正本は政府にありますが、副本は地元に残されています。

二神島には、被差別の問題がありませんから、ある程度自由に見せてもらうことが可能なのですが、ちょっと問題があります。全戸職業が「農」って書かれてあるんですよ。そんなことありえないんですよね。100パーセント漁業で生計を立ててきて、農地なんてほとんどないような島なんです。だけど、士農工商のお役所的な発想で職業を切ると、農民に入れるしかないから、全戸「農」っていうことになるんですよ。この島の調査をした網野善彦さんは、極めて間違った歴史認識を植え付けかねないと言っていました。この歴史資料だけを研究室で読んで、全部が農業の島だと思ったら大間違いだということです。現地に行ってみれば、当然農家なんか一軒もないし、当時も農家なんか一軒もないことは明らかだけれども、現地でもって資料を読むことをしないと、とんでもない間違いを犯す可能性がある。そういうことはよくあります。

もう一つ、「文字をもつ伝承者」で紹介されている福島県の磐城の北神谷の高木誠一さんの話です。この方は、非常に有名な郷土研究者だったので、**写真11**のような記念芳名録が残っています。大正時代に来たロシアのニコライ・ネフスキーの名前もあります。柳田国男は、2回来ています。渋沢敬三も来ています。見てほしいのは、**写真12**の宮本常一の記帳です。宮本は、昭和15年にここに来て、「民俗研究のすぐれたる先学のお一人と

写真 11

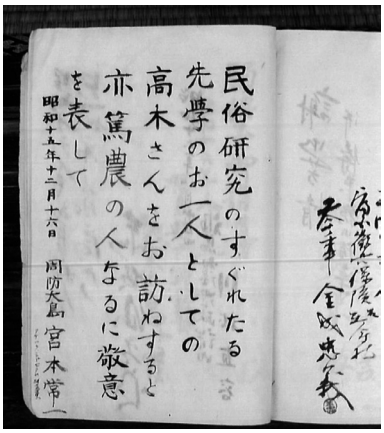


写真 12

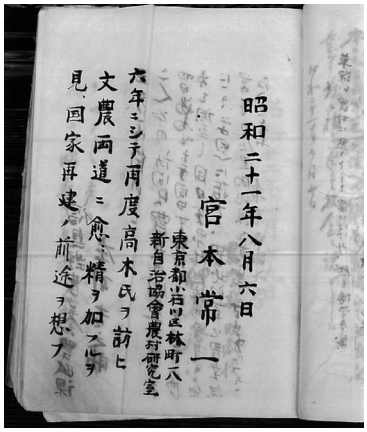

昭和二十一年八月六日
宮本常一
東京都小石川区林町八
新自治協會農村研究室
六年ニシテ再度高木氏ヲ訪ヒ
文農両道ニ愈々精ヲ加フルヲ
見、国家再建ノ前途ヲ想フ

写真 13

しての高木さんをお訪ねすると、亦、篤農の人なるに敬意を表して」と、漢字とひらがなで書き残しています。**写真13**は、戦後間もない時期に再訪したときのものです。「六年ニシテ再度高木氏ヲ訪ヒ、文農両道ニ愈々精ヲ加フルヲ見、国家再建ノ前途ヲ想フ」と書かれています。面白かったのは、太平洋戦争前夜の戦局が悪化していく時代には柔らかい文章を書き残して、戦後の方は文語調になるんですね。宮本さんの心の様子をこういうところから推し量ることができるのではないでしょうか。このことは、一つのヒントに過ぎないというか、論としてどう立てていいのかというのは難しいところがありますが、こういう文体の変化も面白いなあと思ったりしました。これも現地で見せてもらって初めてわかることですね。こういった文字資料も軽視できないということです。

○旅する土地が結び合う

旅をしていくと、こちらで聞いたことがあちらで聞いたこととつながるということがあります。今やっている連載でも紹介しましたが、先ほどお話しした高知県月灘での例をお話ししたいと思います。そこのサンゴ漁の歴史を紐解くと、明治時代になって江戸時代のような人の移動の制限がなくなって、土佐のサンゴ漁のやり方が長崎の五島列島に伝播するんですね。サンゴ漁師が行き来をするんです。それで、五島列島に行って僕は驚いたんです。僕は、生まれが高知の幡多郡の宿毛なんですけども、親父のルーツはサンゴ漁をする太平洋に面した土佐清水の漁村です。幡多の沿岸部の方言で「ざまに」というのがあります。「事態がはなはだしい」という意味です。「今日はざまに冷やいね」と言ったら「今日は本当に寒いね」という意味なんですけれども、そういう言葉があるんです。

それで、五島列島に行ったときに、この言葉を全く同じように使っていたのにびっくりしたんですよ。「ざあま寒か」とか「ざあまなんとか」って、全くおんなじ意味で、全く同じ言葉を使っているんです。聞くところによるとこの「ざあま」っていう方言は九州には一切ないんです。四国にもないんですよ。高知にもないんです。だから、サンゴ漁をしたところにだけ残っているんですよ。どっちがどっちに伝わったかはちょっとよくわかりません。ただ、サンゴ漁を介した人との交流によってどっちかからどっちかに伝わったことはまず間違いないと思うんです。旅をしていくと、そういうことに気づかされます。

こういう話をもう一つ紹介したいと思います。実は今回、大阪大学に招かれたので、今週末、久しぶりに紀伊半島をぐるっと一周して帰ろうと思っています。いまネットの時代になって、非常に驚くべきことが分かったんです。それはね、さつま揚げの呼び方なんです。地方によっていろんな呼び方があるんですけれども、僕の実家がある四国の西南部では「じゃこ天」って呼ばれています。豊後水道を挟んで、対岸の大分県のあたりでも、「じゃこ天」というところが多いと思います。僕の実家がある土佐清水では、じゃこ天ともいうんだけれども、「ほねく」という言い方もあるんですよ。僕は、「ほねく」って一体何なのか、長い間疑問だったんですね。それで、「ほねく」という呼び方についてずっと旅先で聞いて回ってきましたが、知らないという地域がほとんどでした。

10年以上前にネットで調べた頃には分かりませんでしたが、最近再度調べてみたら、この「ほねく」という呼び方が和歌山県の有田だけにあるということが分かったんです。有田市というのはミカンで有名なところですが、「ほねく」を太刀魚のすり身で作るそうです。そんな呼び名が太平洋で繋がっている。だから、漁師同士の行き来があったはずなんですね。どちらでもカツオなんかは当然獲りますし、カツオ漁師というのは、黒潮に乗って移動しますからね。当然人の行き来があって不思議はないのですが、「ほねく」って言葉が和歌山の有田にもあったということを、最近知った次第です。それで、明日そのことを確かめに行ってきます。

○庶民に生きる「公正（フェアネス）」の感覚

先ほど、滝畑の左近熊太さんの話をしましたけれども、そのお孫さんの左近又三郎さんにお話を伺ったことがあります。この方は、戦時中神戸の商船会社に勤めていて、仕事で世界中を旅して、地球を何周もするような旅をした人で、地元の人によると左近熊太さんに一番よく似ているお孫さんらしいです。滝畑がダムに沈むっていうときに、大多数はもうダム建設に賛成していたようなんですが、左近さんは、最後までダム建設に反対したといいます。左近さんは、アフリカのザンジバル（奴隷貿易の拠点）で植民地の人たちがいかにこき使われているかとか、パナマ運河（1940年完成）を掘削しているちょうどその現場を見て、現地の人がはした金で豊かな国の人たちに使われるところを見てきて、もう結果は目に見えているんだと言って反対したわけです。結局、こんなダムなんか作ったって、あぶく銭で都会の人たちの繁栄のために使われるだけで、私たちの村は破壊されるんじゃないかってことを主張した人なんです。最初にお会いしたときに、そのときのことを浴びるほど聞かせていただきました。

二度目にそこに行ったときに、ぜひともあの時の話を書かせてもらえないかってお願いしたんです。そうしたら、左近さんは、それはできないっていうんですよ。話したくない

わけじゃないんですね。初めて会った時あれだけさんざん話してくれたわけですからね。なぜかというと、ダムの推進派のリーダーだった人が亡くなっているって言うんですよね。あなたは、私の言い分だけ聞いて、結局ダムを推進したその人に話は聞けないだろうと。そうすると、話が偏るっていうんですね。それだと、不公平だと。私は、前回あなたに話はしたけれども、それは一方的な話になるから書いてもらっちゃ困ると。いまだにダム建設の問題は滝畑に影を落としているという人もいましたが、原発と一緒ですよね。それは、書くことは断られたんですが、庶民のフェアネス感覚に触れたというか、非常に気分が良い体験でした。

もう一つ、高知県の梼原の下元和敏さんの話をしたいと思います。梼原は「土佐源氏」の舞台になった場所ですが、土佐源氏のお爺さんのモデルになった人のお孫さんが下元さんです。「土佐源氏」というのは、若い頃博労だったんですが、極道の報いで目がつぶれてしまって、乞食になってしまったっていう人の一代記ですよね。下元さんは、そのお孫さんなんです。実は乞食じゃなかったっていうことをこのご親族が言っていて、宮本さんに対しては腹に据えかねていると言って怒っているんですよ。その問題には今日は触れませんが、宮本さんが来たときのことを覚えているんですね。ちょうど小学校6年生だった頃に確かに宮本さんが来たって話を丁寧にしてくださいました。

ですが、宮本さんに対しては怒っているんだけれども、宮本常一のファンだといって訪ねてきた学生に対しては宿まで貸してくれました。それ以来、家族ぐるみの付き合いじゃないけれども、下元和敏さんが亡くなった後も、その息子さんといまだにやり取りがあって、関係がつづいています。自分のところのおじいさんを、乞食でもないのに乞食と言われて宮本さんに対して怒っている人がですよ。その人が学生に対してはちゃんと話も聞かせてくれるし、宿も貸してくれるということですよね。村の歴史にも非常に詳しくて、そういう話も喜んで聞かせてくれるんですね。そういうところに、庶民に息づくフェアな感覚を感じるというか、一方的に追い返してそれでお終いっていうんじゃない何かがあって、それは宮本さんの足跡を訪ねて歩くと、そこかしこに息づいている感じがしましたね。そういう人との出会いを求めて、話をまた聞きに行こうというふうになりますよね。

○下調べは必要か

時間も残り少なくなってきましたので、駆け足でいきましょう。調査に入る前の下調べ、これ大問題なんですね。行き当たりばったりでいくか、それともしっかり下調べをしていくかということです。だいたい、大学の先生・研究者は、自分の教え子に対してはきっちり下調べはしていけと言うんじゃないんでしょうかね。たぶん、その通りなんだろうと思いますね。下調べをきちっとした方がいいですよ。インターネットも何でもある時代に、

何にも知らないで行ったらやっぱり何しに来たのっていうことになりかねないですしね。

ただ、効率的ですけれども、マストではないだろうと思います。たしかに下調べをして行くと、調査は効率的に終えられるんですよね。ただ、もし分からないことがあったら、非効率ですが、何度も何度も行けばいいんですよ。例えば、さっきお話ししたように、一度目の訪問では左近さんからダム建設反対のときのことを聞けたけど、二度目のときにああいう反応が返ってくるとかですね。そういうことって、よくあるんですよ。それはどっちがいいってことじゃないです。そういう思いがけないことが起こるので、何度も何度も足を運ぶことが大事だろうと思うわけです。

ただ、思い出すのは、保健婦さんに取材したとき、「いい加減なら追い返すつもりだった」と言われたときのことです。怖いなあと思いました。その方は、高知の人でしたが、もう退職されて旦那さんも亡くなって、一人暮らしをされていました。仕事をしていた頃のことを教えてくださいってアポを取ったら、最寄りの駅で待ち合わせして、駅前の喫茶店で会うことになりました。そこでもう話が聞けるもんだと思って、挨拶をして、調査の趣旨を説明して、昔の話を聞かせてくださいとお願いしました。じゃあテープを回させてもらってもいいですかと聞いたら、その時初めて、うちに来てゆっくり話をしようって言われたんです。僕は、その意味がよく分からなくって、ここでいいですよって言ったら、もしあなたがいい加減な気持ちで来たんだったら、ここでコーヒー一杯だけ飲んで追い返すつもりでいましたと言われたんですね。しかし、話を聞いたらあなたは悪い人ではなさそうだし、研究の意図もしっかりしているし、よく調べて来ていることが分かったから、家でゆっくり話をしましょうということになったんです。

そう聞かされたとき、肝を冷やしましたね。こちらはもう話が聞けると思って、向こうが指定してきた駅前の喫茶店で2時間ぐらい話をして帰ろうと思っていたんですけど、そうじゃなかったんですよね。だから、向こうにも見られているってことは肝に銘じておいた方がいいし、あまりいい加減な形で行くと、人にもよりますけれども、気分良く帰ってもらうかたちで追い返されると思いますね。「帰れ！」って怒鳴られることは稀だと思いますけども、にっこり笑って、「じゃあ、これで」って追い返されることはあるんじゃないでしょうか。

とはいえ、下調べの問題は、相手にもよるし、一概には言えないことです。いい加減な調査だってことがちょっとでも分かると、それ相応の対応しかしてもらえないだろうし、だからといって、感動の力を借りないとやっぱり創造的なものって生まれないとも思うんですね。入念に下調べをして行って、相手の話を聞いても、「あっ、それ知ってる」、「あっそれもう下調べしてきましたから」、「それはもう知ってますから」とかって言うほどだと、それはもう聞き書きにならないし調査にならないですね。だから、「そういうことがある

んですか」って心から感動できるような話をどれだけ引き出せるか、そういう場を作れるかってことが大事なんだろうと思います。

○聞き書きと編集の問題

次に、聞き書きにおける編集の問題についてお話ししたいと思います。聞き書きを文字に起こしたものをどういうふうに使うのかという問題です。もちろんそれは何に使うか、どういう研究をするのかによって変わりますから、一概には言えないことなんですけれども、ただ話をまとめすぎると話のディテールがそぎ落とされます。とはいえ、逐語録のままで使うのは難しいことでしょうから、ある程度話はまとめなくちゃいけないことも確かです。このまとめるって作業がくせ者でして、頭のいい人ほど、結局こういうことでしょっていう言い換えが上手です。そこはとても難しくて、語り手にとっても断言できないとか、明確に話せないとか、簡単に白黒つけられないということは、なかなか学術論文のデータとして使えないことになりがちなんだけれども、実はこういう部分が非常に大事になってくるってことがあります。

「ゼンさんハルさん」を例にお話ししたいのですが、「ゼンさんハルさん」は『「忘れられた日本人」の舞台を旅する』に出てくる方です。土佐の寺川というところは、焼き畑を主体とした米がとれない山奥の村ですが、そこに伊予から「ゼンさんハルさん」という行商人の夫婦がやって来たという話を紹介したんです。僕は、別に落としてもよかったんですが、聞いた話のまま載せたんですね。別に「ゼンさんハルさん」っていう名前が大事なわけでもないし、行商人が来ていたという事実だけが重要なのですから。ところが、この本を出してから、九州のおじいさんから、あなたの本を読みましたと電話がかかってきて、「ゼンさんハルさん」というのは私の父と母だと思いますっていうんですね。間違いなく、私の父と母は松山で漁師をしていて、自分のところで獲れた魚を干物にしては売って歩いていましたというんです。ただ、あなたが書いている時期というのはもう割と豊かになっていた時期で、行商にはあまり出てなかったと思うけれども、間違いなく行商をしていたというんですね。それを聞いて、僕はびっくりしましてね。その人から聞いた話はまだどこにも発表できていないのですが、エピソードの一つ、後日談です。それも、私がその本の中で「ゼンさんハルさん」っていう名前を残さなかったら、当然その人はそういう話をしてこなかったんですよね。まさにそれは「神は細部に宿る」としか言いようがないことです。それはこちらが狙ったことではなくて、結果論に過ぎないことなんですけれども、私が話を編集していたら聞けなかった話なんですね。

駐在保健婦に関する調査では、こんなことがありました。『駐在保健婦の時代』では、保健婦さんの聞き書きをふんだんに使ったんですが、あそこに使っていない聞き書きで、

いまだに引っかかっていることがあります。それは、「らいの話もねえ……」って言われた体験です。ハンセン病の人たちを隔離しなければならない立場にあった当時の保健婦さんたちに話を聞いていたんですが、ある退職されたベテランの保健師さんに聞いたら、「らいの話もねえ……」って言ったまま、絶句して、ぽろっぽろっと涙を流したんですね。それまで気丈に話をされていた人なんですよ。僕はびっくりして、何があったんだろうと思ったんだけど、僕はうろたえてしまって、何があったんですかとも問い返せず、おろおろしてしまって、話題を変えた記憶があるんです。その話はどこにも発表してないです。その人の話はいまだに、何というか引っかかっていますね。それをどう受け止めていいのか、それは使いようがないっていうか、使えないですね。しかし、そこにたぶん一番大事な問題があるっていう感じがしますね。

○受け売りで話す人、誤りを話す人

あと、よくあることで、他人の経験を自分のことのように話す人がいます。ハンセン病に関する取材では、差別を受けるというので、自分の名前も出自も隠してひっそり生きていて、面談も断るっていう人が多いです。だから、自ら進んで話してくれる方っていうのは非常に貴重な存在であるわけですけれども、ある国立ハンセン病療養所である方からお話しを伺った後で、別の入所者の人から「あの人は、人の受け売りばっかり自分のことのようにしゃべるからね」ということを聞きました。僕は、その人の人生だし、進んで語る役をやってくれている以上、非常に貴重な話を聞けたと思うし、ただその問題をどういうふうに考えるかですね。多くの人は、大学の先生とかが来ると、私はとても人前で話したくないっていう人たちばかりですが、一方で、自分しかそういう話ができないと言って買って出る人もいるわけです。そういう人が、そうやって自分の経験だけじゃなくて、人の経験を自分の経験として話して、聞いた方はその人の話として受け取って帰るわけですから、大きな問題だなとは思います。ただ、その問題をどう考えるかってこともまたハンセン病の問題ですから、非常に難しいなと思ったことがありますね。

もうひとつの例は、ある場所で宮本常一が二度来たという話を聞いたことです。その人自身は、宮本さんとある場所で会って薫陶を受けた方であることは間違いないんです。ただ、宮本さんは、その場所に行っていないんですよ。僕もよく知らずにその人の話を聞いて、ああそうですか、宮本さんこのことについて書いてないけど、やっぱり来ていたんですねって、帰ってきたんです。ただ、今は宮本さんの日記が公開されていますから、後から調べてみると、どうも宮本さん自身はその場所へは行っていないようだってことが分かりました。宮本さんとは縁もあるし、話も聞いているし、個人的に影響を受けた人なので、

自分のところに宮本常一が来たって言いたかったのか、それとも記憶の誤りなのか、ひょっとしたら別の先生と間違えたのか、それは分かりません。分かりませんけれども、宮本常一が二度来たって、わざわざ二度とまで言って、どこそこの旅館で泊まったとか、相当詳細に話してくれたんですよ。だけど後から調べてみたら、どうも宮本常一はそこには行っていない。

なんかこれは、ほとんどもう弘法大師が来たとかっていうのと似ていて、有名人が来たと言いたい人の心理というか、そういうものなのかなあとも思うんですよね。だから、そういう受け売りで話す人、誤りを話す人の話をどう考えるかというのは、根の深い問題だと思います。この問題に、今日は答えは出ません。ただ、そういう論点があるし、そういうことには非常に気を配っておいた方がいいと思います。それと、みなさん、体験しないよりはこういうことを体験しといた方がいいですよ。どこかで、失敗も含めてね。

○学問は遊びから生まれる

最後に、ポジティブなことを言って終えたいと思います。宮本さんが編集した平凡社から出ている本に『日本残酷物語』というシリーズがあります。1995年に第1巻が平凡社ライブラリーに入っていますが、そのとき網野善彦さんが編集者から解説を頼まれたらしいんですが、それを断ったという話をしていました。その理由として、こんなことを言っていました。「どうも私はあの『日本残酷物語』というタイトルが嫌で、だから宮本さんの仕事の中で良いものと思えないんです。宮本さんは、当時、ある種人生がみじめで残酷という捉え方をしていたのではないでしょうか。どこかで、宮本さんはそういう認識を改められたんじゃないでしょうか」って、網野さんが言われたんですね。僕との雑談の中で出た言葉で、網野さんはどこにも書き残していないと思います。

それで、僕は、そうとも言えないのではないかと反論しました。宮本さんがあそこで「残酷」と言っているのは、「忘れられてしまう人生こそが残酷」って言っているんです。こういう人生がみじめで残酷だっていう言い方はしていない。それは、誤解ですよって、僕は網野さんに話した記憶があるんです。

つまり、宮本さんがしたことというのは自身の旅の見聞から、日本列島各地の埋もれた、忘れられた庶民の文化や歴史の多様性を描き出すという試みだったのだろうと思います。その試みは、何というか、あれもあるこれもある式の、単に置いて並べる式の文化相対主義とは一線を画していたんじゃないかっていうことを言いたいんです。

なぜ旅をするのか？　やっぱり、旅をすることによって一つの支配的な言説が破壊されて、従来の支配的な歴史が塗り替えられるってことが大事なんじゃないでしょうか。それが、宮本さんの目指したことで、それこそが「忘れられていることが残酷なんだ」という

言葉にあらわれていると思います。そして、忘れられている人たちの生を書き留めることで、いわゆる支配的な「日本人」という言説に変更を迫ることが、『忘れられた日本人』という本のタイトルに込められた意味だったのだとも思うわけです。それが、なぜ旅をするのかという問いに対する一つの答えになるのではないかと思っています。

自分自身についても言えば、まだ誰も知らない見知らぬ宝物に出会うことへのワクワク感、期待感ですよね。それを掘り起こして、後世に伝えていくことに対する期待だと言えます。僕は一貫して在野にいる人間で、研究機関に所属している専任の研究者として生きているわけではないので、僕の立場からのみなさんに対するメッセージですけれども、今こういう遊びを伴う学問っていうのはしづらくなっていますよね。質的な調査をする人も、倫理審査だとかなんだとかっていうのを受けなきゃならなくなっていますよね。そうすることでどんどん創造的なフィールドワークがやりづらくなっている一面もあるんじゃないかなって思うことがあります。

最後に一言言いたいのは、どんな学問も、必ず遊びの中から生まれるということです。別に奇を衒って言うのではなくて、古今東西の独創的な仕事というのは常に遊びの中から生まれているんです。宮本常一が上空の景観から日本人の開拓の歴史を想像して遊んだように、そういう遊びを伴う仮説の数々をいくつ自分の中に作れるか。そして、歩きながらそれを検証していくという楽しさです。そういう遊び心を持つ研究者が、この大阪大学の日本学を志すみなさんの中から出ることを願って、今日の話を終えたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

◆閉会の挨拶（北村毅）

木村さん、ありがとうございました。フィールドワークの楽しさが直に伝わってくる軽妙な語り口で、私も、自分の体験と重ね合わせながら聞いていました。最後の「忘れられていることが残酷」という言葉には、ハッとさせられました。私は、これまでずっと戦争体験の話を聞いてきたのですが、まさにこの忘れられるということがどれだけ残酷か、思い知らされることがたびたびありました。あの戦争で起こったことの数々を忘れないでいるためにどうすればいいのかということは、大きな課題です。ですが、どうあがいたって、実際は忘れられていくことの方がほとんどなわけですよね。言葉になって、現在まで残っていることなんて、氷山の一角の、そのまた上の薄氷に過ぎない。そういう中で覚えていくということに、民俗学のような聞き書きをする学問がどのようにサポートをしていけるのかということも、問われているのかなと思います。

今日の木村さんの話は、いま研究テーマについて悩んでいる学生、あるいは、聞き書き

をしたいけど、どういう対象にしようか迷っている学生に、大きなヒントと勇気を与えてくださったと思います。続きは、この後、懇親会の席でということにしたいと思います。今日は、長い時間、本当にありがとうございました。

【プロフィール】
1971年生まれ。神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程修了。博士（歴史民俗資料学）。著書に『「忘れられた日本人」の舞台を旅する―宮本常一の軌跡』（河出書房新社、2006年）、『駐在保健婦の時代1942-1997』（医学書院、2012年）、『来者の群像―大江満雄とハンセン病療養所の詩人たち』（編集室水平線、2017年）、編書に『大江満雄集詩と評論』（共編、思想の科学社、1996年）、『癩者の憲章―大江満雄ハンセン病論集』（大月書店、2008年）がある。現在、「人間学工房」のウェブサイトで「宮本常一伝ノート」を連載（完結）。https://www.ningengakukobo.com/dennote